

子どもの言葉の獲得のプロセスと発語の時期に関する研究

A Study on the Children Language Acquisition Process and the Timing of Speech

前田 綾子
Ayako MAEDA

要旨 (Abstract)

子どもは、生まれながらに言語を獲得する能力をもっており、胎児期においてすでに母親の声を聴き分けることもできるとされる。生まれてからも母親との愛着関係を育む過程において愛情のこもった言葉をかけてもらいながら、応答的な関係が育っていく。そしてクーイングから始まる喃語の時期を経て、発語にいたるのである。その発達段階は昔も今も変わっていない。しかしながら、保育現場で、子どもたちの言語活動を観察していると、「以前の1歳時よりもっと言葉が出ていたのに・・・」という感覚が強くなってきた。そこで、乳幼児の発達調査を調べてみると、10年間で初語の出現時期が遅くなっていることが明らかとなった。保育所の入所面接資料を調べても、初語が出ている子どもが少なく、保健センターでの1歳6か月健診においても言語が1つくらいだったり、出ていなかったりして経過観察になる子どもが増えていることから、その原因と思われることを社会的背景と照らし合わせて、考察をすることを目的とした。

その結果、家族形態の変化としての核家族化は、子どもへの言葉かけを減らす要因のひとつとなっていることが示唆された。さらに、もう一点は家庭生活の中にDVDなどのAV機器やパソコンの家庭への導入率があがってきており、子どもの生活の中にも当然に入り込んでいることが要因として考えられるのではないだろうか考える。そしてスマホやタブレットなどの普及により、今後も子どもの発語の時期が遅れると推察される。また、DVDなどの一方的な言葉のシャワーでは、子どもの言葉は発達していくことはない。身近な大人からの温かい言葉かけや応答的な関わりを通して、子どもの言葉の発達を豊かに育てていく必要があるのではないだろうか考える。

キーワード: 乳幼児、ことば、発語、発達

I. はじめに

筆者は30年以上にわたって、保育所で子ども達の生活や成長に関わってきた。その経験を通して今現在、感じていることは、子どもの言葉の育ちが遅くなっているのではないかということである。特に、「マンマ」「ワンワン」といった初語の出現の時期が遅くなっているのではないかとひしひしと感じているので、子どもの言葉の獲得の過程やプロセスを明らかにし、何が子どもの発語を遅らせているのかを考えたいと思い、本研究のテーマを設定した。

II. 言葉の発達について

胎児期において聴覚は受胎24週で聴覚器官が完成し、母親の腹壁を通して外部の音や声を聞いている。そして聞いているだけでなく、他の人の声と母親の声を聞き分けられていると言われている。しかしながら、胎児は声を出すことはできない。このことより言葉の獲得に必要な音声を聞き取るという知覚的側面が、構音技術を身につけるという

運動的側面よりも早く育つということが先行研究により明らかとなっている。

産まれてすぐの新生児は、口腔が狭く、そのほとんどを舌が占めており、口頭が高い位置にあり、口腔と鼻腔が分離されていないため声帯の振動に共鳴を与えることができない。そのため新生児の泣き声は独特なものであり、言語音にはなっていない（小椋ら，2015）。

生後2か月～4か月くらいになるとクーイングといわれる舌が口蓋に近づいたり、接触したりすることで子音が発生し、「んぐぐ・・」「くう・」というような声をいろいろな高さや長さで出し、ひとりで話しているようにも聞こえる。そして4か月から6か月の間のクーイングから喃語への移行期を経て、基準喃語へと発達していく。聴覚に障害がある子どもは、自分の声を自分で聞き取ることができないため、クーイングから基準喃語に移行していくことが難しい。喃語は誰かに向けて発せられているのではなく、「baby talk」とも言われる自分で自分の発声を楽しむ遊びであり、「ばばば・・」のような子音・母音の連続である重複喃語と、「ぼぶだびぶ・・」のような子音・母音音節パターンの連続である「多様喃語」に分類される。10か月以降になると「んま」「あた」「ばあ」など重複が徐々に減り、明確な発音が出てくる。この時期に入ると、大人の発声の模倣も始まり、「あい（はい）」「ねー」などの短い声が出て言葉のやり取りと理解され、一段と大人とのやりとりが活発になり1歳ごろには初語が出て「まんまたべる？」と尋ねると「まんま」と言ったり、大人が車の写真を指差すと「ぶっぶー」と言ったりするなど、示す物と音声に対応する有意味語となる。

言葉というのは、人間だけが獲得できるもっとも強く効率的なコミュニケーション手段である。

言葉がコミュニケーション手段である以上、必ずそこにはコミュニケーションをとる必要のある対象者やコミュニケーションをとりたい対象者が存在する。

ポルトマンの生理的早産説にもあるように、他の動物に比べて非常に未熟な状態で生まれてくる人間の赤ちゃんは、誰かに依存しないと生きてはいけない。そのため新生児は泣くことで空腹感や不快感などの本能的な欲求を伝えようとする。それに応じて母親が優しく言葉をかけ、身体に触れながら欲求を満たしてくれる。そのような温かい応答関係が母子のアタッチメントや愛着関係となり、子どもの発達のベースになることは言うまでもない。

言葉を使わないコミュニケーションをする時期に、乳児の発信を温かく受けとめ、声や表情や行動で示すと、すぐに思いを受け止め応答してくれる大人が身近にいなかったら、乳児は自分から発信することをあきらめてしまい、言葉だけでなく人と関わる楽しさや心地よささえ獲得できなくなってしまい、探索活動を始めようとする意欲さえ育たず、子どもの発達に大きな影響を与えられられる。これは、ホスピタリズムに近い状況が家庭内で起こりうるということである。

近年、保育所に入所する前の面接で、子どもの発育状況を聞き取るときに感じるのは、一語分が出た月齢が遅くなっていることである。以前は12か月ぐらいで「まんま」「わんわん」などの一語文が出ている子どもがほとんどだったのだが、ここ数年、1歳の誕生日を過ぎていても初語がでていない子どもがとても多く認められる。

少し古いデータではあるが、10年ごとの厚生労働省が行っている「乳幼児身体発達調査」における一般調査による幼児の言語機能通過率を見てみると、平成2年、平成12年、平成22年と徐々に言葉の発達が遅くなってきていることがわかる（図1、図2）。

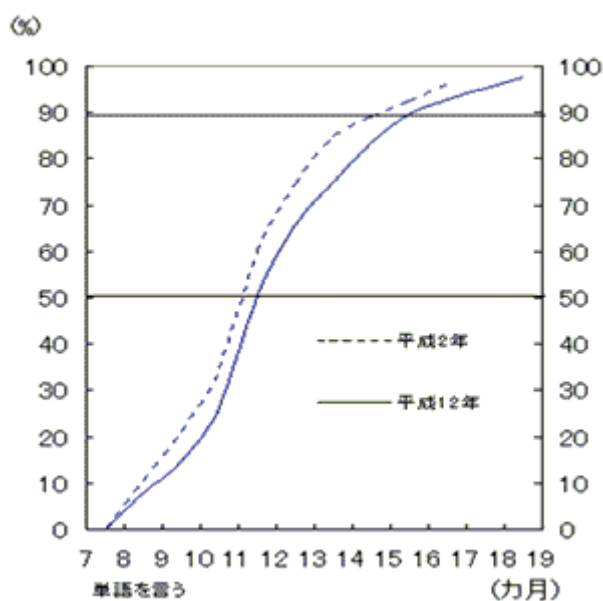


図1 乳幼児の言語機能通過率（平成12年乳幼児身体発達調査より）

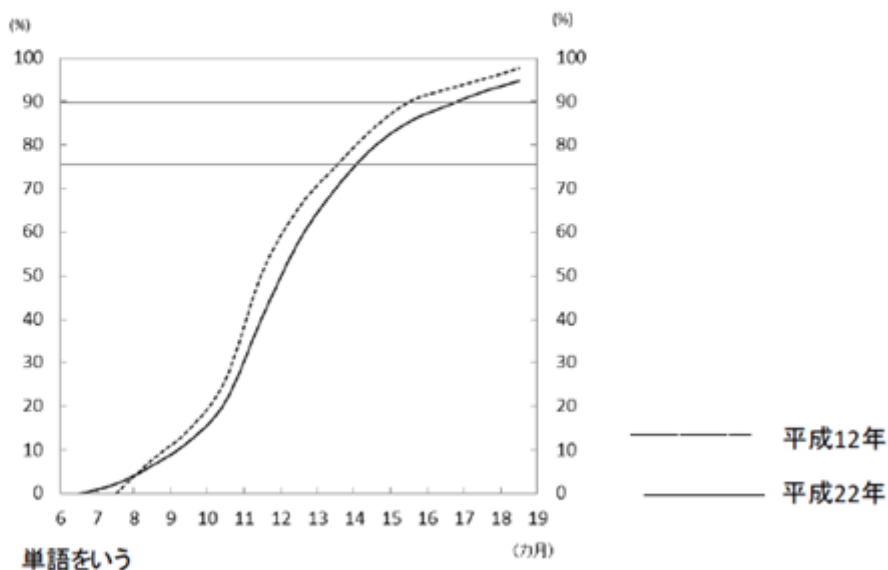


図2 乳幼児の言語機能通過率（平成22年乳幼児身体発達調査より）

では、何が子どもの言葉の発達を遅らせているのかその要因を考えてみたい。

ひとつは、やはり核家族化の要因があるのではないだろうか。時代とともに核家族が増え、おじいちゃん、おばあちゃんや親戚が近くに住んでいない家庭も多い。そのような状況は子どもに関わる大人を減らしており、子どもへの言葉かけを減らしている。また昭和時代のような近所付き合いもなくなり、ますます子どもに話しかける大人が減り、親子が孤立する状況になってきている。そのような状況の中で子育てに不安を感じる母親が増えており、子どもとふ

たりきりであるときに子どもとどう関わったらよいかかわからず、言語的な関わりが不十分になってきているのではないかと考えられる。

もうひとつの要因は、パソコン、携帯電話、様々なAV機器の普及だと考える。特に、平成22年はパソコンや携帯電話の普及率が上がりインターネットの利用率が急増した時期と重なる。大人がパソコンや携帯電話に夢中になることが、子どもへの関わり方を変えてしまったことは十分に考えられる。本来なら、子どもと母親が言葉の獲得に繋がる応答関係をしっかりと結ぶ時期から、子どもにDVDやパソコンで動画を見せるといったことが珍しくなくなった。保育所でも、保護者からディズニーや日本のアニメのDVDを見せると静かにじーっと見ているという話を聞くようになった時期でもある。

この乳幼児身体発達調査は、10年ごとに実施されている。次回の手定は、令和2年である。平成22年と令和2年の違いで、子どもの言葉の発達に影響を与えていると考えられるのは、やはりスマホ（携帯電話）の普及である。普及を乗り越えてスマホ依存症と言われる大人と子どもが増えてきていることである。スマホは子育てにも影響を与えている。スマホを1日に何時間も見ている母親が、そうでない母親に比べて乳児期の温かい応答的な関わりや、言葉かけが少ないことは想像に難くない。子育てにもスマホを使い動画を見せたり、アプリを使ったりすることも珍しくない。保育所入所時の面接で、生活リズムや習慣などについて聞き取ると、「寝るときはどのようにして寝かしつけますか？」という質問に、「スマホで動画を見せて」とまじめに答えた保護者がいた。そのような子育てが当たり前になってきている状況で子どもの言葉の発達が早くなるとは思えない。

実際に、平成30年4月に入所した1歳児13名の4月の言葉の発達段階は、下の表1のようであった。

表1 1歳児の言葉の発達

	年月齢	① 指差し ② 言葉 ③ その他
1	1歳7か月	① 12か月 ② 喃語
2	1歳7か月	① 12か月 ② 単語有り
3	1歳3か月	① 無 ②クレーン様 ③共同注意 無
4	1歳3か月	① 無 ②クレーン様 ③共同注意 無
5	1歳2か月	① 1歳2か月 ② 単語有り
6	1歳2か月	① 無 ② 喃語
7	1歳1か月	① 10か月 ② 喃語
8	1歳0か月	② 10か月 ② 喃語
9	1歳0か月	① 無 ② 移行期
10	1歳0か月	① 無 ② 喃語
11	1歳0か月	① 10か月 ② 喃語
12	1歳0か月	① 11か月 ② 喃語
13	1歳0か月	① 10か月 ② 喃語

13名中単語が出ているのは2名であり、12か月における「言葉を言う」の通過率は、約15%であった。また、上の表で喃語となっている子どもでも、喃語がよく聞かれる子どもは2名でその他の子どもは喃語の発声自体が少なく、

指差しも頻繁に見られるものではなかった。そして、叙述的指差しを示す子どもも13名中2名であった（うち1名は、保育経験有り）。

保育所に入所してからは、保育士の「おしっこ出たね。気持ち悪かったね。変えようね」「気持ちよくなったね」などの言葉かけを伴う養護や、「ブブーきたね」「ワンワンやね」など指差しをしながら、マザリングを使った遊びの中で物と名前を認識させる活動など、温かい応答関係を基礎とした言語活動が行われた。

7月の時点では、多くの子どもの発声が豊かになり、クーイングだった子どもだった子どもが発声は少ないが、喃語に近づいてきたり、喃語であった子どもも単語が出たりしている。

これは、保育所における言語活動が子どもに影響をもたらした結果だと考える。子どもから出る単語として「せんせー」という言葉は保育所に入ってから耳にするようになったと思われる単語の1つだが、子どもの発する単語の早期の段階で「せんせー」という単語が出ていることから、それが考えられるのではないだろうか。

家庭での言語活動が、DVD やスマホなど一方的なものが多くを占めて行っている現代だからこそ、温かい応答関係で結ばれた言語活動がより重要になっており、保育所の役割もかつて家庭で普通になされていたことが養育力の低下や生活状況の変化により、保育所の責任としてしなければならないことが増大していると考えられる。

Ⅲ. 保育所保育指針との関係

ここで、2018年の保育所保育指針改定においては、

第1章 総則 2 養護に関する基本的事項 (1) 養護の理念 イ 情緒の安定 (イ) 内容 ① 一人一人の子どもの置かれている状態や発達過程などを的確に把握し、子どもの欲求を適切に満たしながら、応答的な触れ合いや言葉かけを行う。

第2章 1 乳児保育に関わるねらい及び内容 (1) 基本的事項 ア 乳児時期の発達については、視覚、聴覚、などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。これらの発達の特徴を踏まえて、乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である。

(2)ねらい及び内容 イ 社会的発達に関する視点「身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。

(ア)ねらい ① 安心できる関係の下で、身近な人と過ごす喜びを感じる。② 体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。③ 身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感が芽生える。(イ)内容 ① 子どもからの働きかけを踏まえた、応答的な触れ合いや言葉かけによって、欲求が満たされ、安定感をもって過ごす。② 体の動きや表情、発声、喃語を受け止めてもらい、保育士等とのやり取りを楽しむ。④ 保育士等による語りかけや歌いかけ、発声や喃語等への応答を通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ。(ウ)内容の取り扱い ② 身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを表し、それに相手が応答する言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていくことを考慮して、楽しい雰囲気の中での保育士等との関わり合いを大切に、ゆっくりと優しく話しかけるなど、積極的に言葉のやり取りを楽しむことができるようにすること。(平成30年保育所保育指針)と記されていることから、言葉の獲得に至るまでの過程における保育士の関わりが重要である。保育指針には、乳児保育として挙げられているが言葉の獲得に至っていない、1歳児、2歳児保育においても同様のことが求められる。

IV. 総合的考察

大人達が、言葉によるコミュニケーションが苦手になってきているこの時代に、言葉を育くむための子どもとの関わりが今まで以上に必要となっていくだろう。

言葉によるコミュニケーションは人間だけがもつ、とても高度なコミュニケーション手段であり、我々人間は言葉を使うことで言葉の裏にある表現されていない思いをも理解することができる。ヒトと類人猿は99%の遺伝子が同じで、異なるのはわずか1%である。類人猿のであり、ボノボ「カンジ」はその優れた能力を使い、自分の欲求をキーボードや行動で人間に伝えることができ、人間からの言葉での指示を理解し行動するという他のボノボでは不可能であったコミュニケーション能力の高さを示した。しかし、人間の子どもの言語理解能力や一語文から2語文、3語文から助詞を使った話言葉への発達を考えると、1%のヒトと類人猿の遺伝子の違いの大きさを感じる。この1%には人間が人間たる所以や数限りない可能性が含まれている。

現在は、発語の月齢が遅くなったと言ってもその後の発達に影響を及ぼす程のものではなく既存の定形発達の枠からはずれものではないかもしれない。しかし、私たち保育者は温かい応答関係を通して子どもたちに豊かな言葉を育み、豊かな心を持つ子どもに育てていくことが、今後ますます重要になっていくであろう。

文献 (References)

- ・ 小椋たみ子・小山 正・水野久美[著]「乳幼児期のことばの発達とその遅れ」2015年、ミネルヴァ書房
- ・ 小西行朗・小西薫・志村洋子[著]「赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育」一般社団法人日本赤ちゃん学協会編集、2017年、中央法規出版
- ・ スー・サベージ・ランバウ/ロジャー・ルーウィン[著]石館康平[訳]「人と話すサル「カンジ」」1993年、講談社
- ・ 厚生労働省「保育所保育指針」2018年、フレーベル館
- ・ 厚生労働省「乳幼児身体発達調査報告」2002年、2012年、厚生労働省HP
- ・ 石上浩美・矢野正[著]「保育と言葉」2016年、嵯峨野書院